カラフルに色づいた世界

鈴木 優奈

二松学舎大学附属柏高等学校

「私から見た世界は歪んでいる。」
そう思って、今日まで自分を偽って生きてきたつもりだった。しかし、実際はどうだろうか本当に私から見た世界だけが歪んでいるのか？

最近、本当の自分が出せなくて、作った自分で友達と会話している。と言ったような作品をよく目にする。初めてそんな題材を読んだときは、私も共感したものだ。
私は、自分の好きなものがわからない。恋がわからないとかそんな意味ではなく、単に自分が好むものがわからないのだ。
以前、クラスメイトと外食に行った。ここで何を頼めばいいのかがわからない。自分の食べたい、好きなものを頼めばいいのだろう。それじゃあ、私は何が好きなのか。何が食べたいのか。これを選ぶことは「普通」のチョイスか。結局、こっそりスマートフォンで調べたその店の一番人気のものを食べた。クラスメイトも、それ美味しいよね、と言って笑う。私は、「普通」の選択肢を選べたことにホッとした。その料理の味は、もう覚えていないけれど。
しかし改めて考えてみると、自分だけが「異端」だという主人公の話が量産されていることに違和感を感じた。そんな話が流行るのは、みんながみんな、自分を偽っているからだ。きっと、人間はみんな自分の言いたいことを代弁してほしくて本を読む。自分の言いたいことを表してくれるとスッキリするから。
きっと、みんな自分が見ている世界は歪んでいると思い込んでいる。だから、普通になろうと躍起になる。みんなと違うことは、不安になるから。

灰色の、カラフルな世界。みんな、同じ色でも違う色に見えている。

例えば、「赤」と言った時にみんなが想像する色は同じものだろうか。
君は、炎のような真っ赤な色を思い浮かべる。あなたは、ピンク色に近いような、薄い赤を思い浮かべるのかもしれない。あの人は、君の思う赤じゃない色を赤だと言うのかもしれない。
みんな、何をもって「普通」だと言うのだろうか。
私は、自分以外の他人は全員「普通」に見えるのだ。何も気負わず、ただ言いたいことを言い、したいことをする。それが普通に見える。それで、普通に見える。そのことが、ひどく羨ましい。そう思っていた。
私の知人は言った。「昔、いじめられていた。」と。
私から見たら、彼女もまた「普通」の女の子であった。でも、彼女からしたら彼女は「普通」からかけ離れた人間なのであった。同じ世界で、同じ景色を見ていたはずなのに。なのにこんなにも解釈は異なる。まるで、パラレルワールドに迷い込んでしまったかのようだった。そう気がついた時、私の見る世界の色はガラリと変わった。一人が見る世界ですら、一色ではないのだ。
そんな出来事があった。このエピソードからだけでは、私と彼女が普通でないだけであるとも判断できるかもしれない。
こんな話を、私は何人もの人と繰り返してきたのだ。同じような境遇の、自分だけが異端だと思い込む人々…。
きっと自分から見た世界が全てだから。だから、同じ景色を違う色に染めてしか見ることができない。

十人十色とは上手い言葉だと思う。　十人いれば、十色の異なる景色があるから。
「みんな一人一人が特別なんだ。」人を励ます時に、そんな言葉をよく使う。確かに、そうなのかもしれないな。それがいい意味か、悪い意味かはわからないけれど。

みんな歪んだ、カラフルな世界を見ている。